

# 入選

## 「高瀬舟」

森鷗外

情報メディア学科 保延杏奈

私達は今、何を持って犯罪を定義しているのでしょうか。殺人、窃盗、色々なものが挙げられる。では、「自殺」もしくは「安楽死」はどうだろうか。

京都の罪人を遠島に送るために高瀬川を下る舟に、喜助という罪人が乗り込む。誤送役の庄兵衛は喜助が晴れ晴れとした表情で舟に乗っているのを訝しがり、何故、遠島に送られることになったのかを尋ねるところから物語は始まる。罪状は弟殺し。理由は頼まれたからだという。元々喜助の家は貧しく日々生きることすら危うい綱渡り状態であった。そんな時に弟が病気になり薬代を払わなくてはならなくなる。そこで弟は自殺を試みた。しかし手が滑り死にきれなかった。喜助がちょうど帰宅し、発見。弟は殺してくれと懇願する。弟の望を叶えるべく、剃刀を引き抜いたところを近所の人に目撃されてしまった。

突然だが私は安楽死に対して肯定的である。本人が生きていたくないのになぜ死んではいけないのか。普段からそれを疑問に思っている。では、もしここで弟が遺書を残していたら何か変わったのか。情状酌量の余地でもあったのか。きっと何も変わらないだろう。

そして喜助は遠島では賃金も出て、ご飯が食べられるなんてなんて幸せだと続けた。この台詞から現在のネット掲示板でよく見る「獄中のほうが快適」という謳い文句を連想した。今も昔も何も変わらない、貧しい者は貧しいまま一生を終える、逆もまたしかりである。最後に庄兵衛はこの裁判はどうなるのかその目で見てみたいという思いを持つのだが、私が庄兵衛だったらきっと同じ気持ちを抱くだろう。近年裁判員制度が起用されたが高瀬舟のような事件は意見が割れるだろうし、色々な人の倫理観を知り、新発見が出来るのではないだろうか。

この作品は森鷗外から私達、現代人への挑戦状のようなものだと感じた。ぜひ、読了後に少し犯罪について考えてほしい。